島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第27巻２号　１頁～11頁　平成６年３月

貝葉文書・典籍（Palm Leaf Manuscripts）について

――書写素材史研究序説――

三　保　忠　夫*

Tadao MIHO
On the Palm Leaf Manuscripts in Japan
――An Introduction to the Study of the History of Handwriting Materials――

はじめに

書写素材史の研究は，書写（手写）という行為に関わる素材（用紙・筆具・硯などの類）とその使用方法，その結果である文字や綴字の方法，言語，また，文書・書物の形態や機能，等々を対象とする通時的研究である。本稿は，まず，貝葉文書・典籍を取り上げ，書写素材史上におけるその意義を明かにしようとしたものである。

1　貝葉文書・典籍について

貝葉文書・典籍とは，ある種のヤシ[1]の葉を用いて書写・作成された文書や典籍のことである。すなわち，それらの葉を調整し，これを短冊型に整形し，この表裏に竹製や鉄製の尖筆で文字・絵を刻み込み，数十枚を束ねてこれに板，あるいは，竹板を添えて表紙とし，一定の箇所に１～３個の穴を開け，これに紐を通して全体を結束するのである[2]。「貝多羅葉」「貝書」などと称されることもあるが，中国における仏書古目録では「貝葉」としてみえることが多く，英語圏では，ヤシの葉の手写本との意味で，これをPalm leaf manuscripts，または，Palm leaf texts などと称し，その尖筆をStylus[3]と称している。

文書や書物の書写素材としてヤシの葉を用いることは，古く，インド，スリランカ，インドネシア，タイ，ビルマ，カンボジアなどの南西アジア・東南アジアを中心に行われたようである。その葉に文字を刻み込むことのできるヤシが育つ地ならば，どこでも可能であったわけだが，その後，紙（Paper）が登場してからは[4]，これに取って代わられ，書記生活の場からは，徐々に後退していったらしい。インドのベンガル地方の学校では，現在でも石盤の代用に使っているといわれるが[5]，これは，その地方の信仰や宗教のあり方とも密接に関係しよう。また，インドネシアのバリ島では，サラスワティ（Saraswati）を祝う祭りの日[6]，学校で行われる儀式にも祭祀用の貝葉文書，すなわち，ロンタル文書（Lontar）[7]が取り出され，供物が供えられるという。多分に儀式的となっているが，こうした光景も，やがては消えていくのかもしれない[8]。書記用のヤシ（の葉）そのものも減ってきているようにみうけられる。

貝葉文書・典籍の内容はさまざまである。バリ島のグドン・キルティヤ図書館（Gedong Kirtya）に保存されているそれらが，文学，歴史，神話，宗教，法典，儀式，建築，衣料，楽譜など，多種多様な分野にわたっているように，このヤシの葉は，そうした書写素材として，かなり広汎な用途にあったもののようである。

2　日本における貝葉文書・典籍

1991年（平成３年）３月，奈良の薬師寺において，玄奘三蔵院伽藍が落慶された。内陣に安置されている玄奘三蔵像の右手には筆が握られ，左手の手掌部から前腕部には梵篋がたもたれている。梵本漢訳の姿を写したものであろう。梵篋とは，貝葉を綴って経本としたものである。玄奘三蔵[9]とは，中国唐代の僧で，不東の精神をもってインドに求法研鑽の旅をした人物である。その旅行記には，「梵書」「梵本」などとともに「貝葉」「夾」（梵篋）

＊ 島根大学教育学部国語科教育研究室（日本語学）

や「多羅樹林」といった言葉がみえている。玄奘の将来した仏典は，その形態や言語・文字等に小異はあっても，ほとんどは貝葉による梵本（Sanskrit texts）であったかと推測される[10]。

もっとも，これは玄奘に限らない，法顕，宝雲，義浄，その他の西域求法僧，また，東来西域僧の場合でも同様であろう。訳経史をひもとけば，この間の事情ははっきりしてくるものであろう。衆経目録や内典録，釈教録などを一見しても，3，4世紀から8世紀の頃にかけ，さらには，元代の頃にかけても，厖大な「梵本」「梵書」「梵経」「貝葉」「多羅樹葉書」「梵夾（梵篋）」また，「胡本」等が中国にもたらされ，翻訳されていることがわかる。

貝葉文書・典籍は，本来，仏教にのみ関わるものではない。だが，中国においては，これは，すなわち，仏典を意味するものと解してよさそうである。多種多様の梵語文書・典籍の内から，仏教の教義書だけが求められ，選択され，仏像・仏具類とともに流砂・葱嶺を渡って行ったのである。

玄奘将来の経・像は，652年（高宗永徽3年），その散失・火難を恐れ，甎塔を建造し，ここに安置された。この工事には，玄奘自身も簣畚を擔って参加したという[11]。しかし，そうした梵本は，その後，どうなったのであろうか。彼の将来分に限らず，インドから中国にもたらされた幾多の梵本の内，今日には，一体，いかほどが残っているのであろうか。残っていないとすれば，それは何故であろうか。こうした事情については改めて考えてみる必要がある[12]。

日本において，また，中国や朝鮮半島等においても，貝葉（Palm leaf）による文書・典籍は，作成されることはなかった。そうしたヤシ類そのものが存してはいないし[13]，そうした素材を持ち込む必要も方途もなかった。

日本に漢字が初めて渡来したのは，文献では，応神天皇16年とされている。5，6世紀の頃には，日本においても漢字・漢文が書記・解読されるようになったらしいが，それが帰化人の手から一般の日本人（貴族・官人層）の間に普及したのは，大体，7世紀の頃とみてよかろうか。

こうした経過にともない，日本に将来された文書や典籍，また，それらの書写素材は，木簡・紙・毛筆，あるいは，金・石類などによるものであったと推測される。

貝葉文書・典籍，また，これに関する知識は，日本では，仏教とともにもたらされたものらしい。仏教は，6世紀半ばに百済を経て伝わり，聖徳太子の奨励により広まったとされる。将来された仏典の類やそれらにともなう種々の文書の中には，まま，貝葉文書・典籍に関する記述がみえており，貝葉経典（梵本）と悉曇（しったん）学との関わりも深い[14]。日本の古典（国書）一般の中にも，貝葉に関することが散見しているが，やはり，仏教との関わりでみえることが多く，中には，貝葉（文書・典籍）を仏典そのものとした事例もある。今日の国語辞典には，貝葉を「仏教語」（仏教の専門用語）とするものがあるが[15]，日本の辞書としては，これも妥当な見解であろう。

山田龍城著『梵語仏典の諸文献――大乗仏教成立論序説　資料篇――』によれば[16]，わが国に古くから伝存する貝葉経典（梵本）の古写本としては，次が知られる。

（イ）法隆寺（東京国立博物館）所蔵貝葉　2葉
（ロ）河内高貴寺所蔵貝葉　1葉（2葉）
（ハ）近江坂本来迎寺所蔵貝葉　3葉（4葉）
（ニ）奈良海龍王寺所蔵貝葉　1葉
（ホ）京都百万遍知恩寺所蔵貝葉　1葉
（ヘ）近江八橋玉泉寺所蔵貝葉　1葉
（ト）東寺所蔵貝葉　1葉
（チ）洛西清涼寺所蔵貝葉　1葉

この内，（イ）については，マックス・ミュラー（F. Max Müller）・南條文雄（Bunyiu Nanjio）両氏の論著 The Ancient Palm-leaves containing the Pragñā-pāramitā-hridaya-sūtra and the Ushnīsha-vigaya-dhāranī, *Anecdota Oxoniensia*, Aryan Series＜オックスフォード大学逸書集＞, vol. 1, part 3, Oxford, Clarendon Press, 1884年, repr. 1976）また，同書巻末に収めるジョージ・ビューラー（Johann Georg Bühler）の字体学上からの論考，Palaeographical Remarks on the Horiuzi Palm-Leaf Mss.（61～95頁），同じくビューラーの *Indische Palaeographie*（Strassburg, 1896年，1977年，また，1904年，1959年に英訳本，等），以下，干潟龍祥「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」（『密教研究』，第68号，1939年），田久保周誉著・金山正好補筆『梵字悉曇』（平河出版社，1981年，注24文献），その他，（ロ）については，岡教邃「河南高貴寺の多羅樹葉梵書に就て」（『密教』，第3巻第4号，1913年），（ニ）・（ト）・（チ），および，（ロ）・（ハ）・（ホ）・（ヘ）については，岡教邃「本朝古伝貝葉梵筴阿毘曇の断片」（『大正大学学報』，第6・7号＜合輯＞，1930年），（ホ），および，（イ），（ハ），（ニ），その他については，渡辺海旭「京都百万遍知恩寺什宝多羅葉梵筴

断片に就きて」(『宗教研究』，第1巻第1号・第4号，1930・1931年)，(へ) については，榊亮三郎「口絵　玉泉寺所蔵貝葉解説」(『芸文』，第9年第4号，1918年)，また，(ハ)・(ニ) については，干潟論文などの諸論考がある。

伊勢西来寺の宗淵の編になる梵字資料集『阿叉羅帖』(5帖，1837年<天保8年>刊) の第1帖の巻頭には，(イ)・(ロ)・(チ)，および，「南都招提寺蔵」本[17] についての模刻がみえる。また，梵学津梁[18] の「本詮総目」によれば，城州調子瑞泉寺所蔵貝葉 (1葉) とみえるものがあるが，これは，(へ) 玉泉寺所蔵のそれに同じとされる (岡氏論文，大正大学学報)。この他，『望月仏教大辞典[19]』によれば，大阪四天王寺所蔵貝葉 (1葉)，京都青蓮院所蔵貝葉 (2葉) などの存在も知られる。

これらの貝葉経典 (梵本) は，従来，仏教学，密教学などの方面において解説・研究され，梵文，悉曇の研究上，まずは，最も信用すべき本文とされてきた[20]。その内容，言語・文字，作成年代，作成地，経歴・由来等についても，既に，かなりのことが判明しているようである。

しかしながら，これらは，数も多い貝葉経典 (梵本) の内から，何故に日本にもたらされたものであろうか。その基準なり選択目標なりはどういうことであったのであろうか。それぞれ1葉，あるいは，2葉，3葉といった数量 (点数) の意味するところは何であろうか。弘法大師空海，慈覚大師円仁，智証大師円珍等の将来本が，その後に分散したとしても，梵篋の本来的あり方 (形態) からすれば，やはり，不自然との感が否めない[21]。また，(イ) の綴字具は，毛筆・墨汁によるものであって，尖筆によるものではない。(ニ)・(ホ)・(へ)・(ト)・(チ) などの文字も，提出図版を拝見する限りにおいては，毛筆体，その他によるものかとみられ，尖筆 (尖筆体) によるものではないと推察される。

試みるところ，ヤシの葉 (Palm leaf) には，墨筆をもっての墨書は容易でない[22]。いわゆる，墨がのらないのである。これは，もちろん，そのヤシ葉の調整後においてのことである。とすれば，その素材は，はたして，貝多羅の葉 (Palm leaf) であろうか。あるいは，どのような塗料 (ペイント) を用いているのであろうか。この点，先学は，どのように了解されていたのであろうか。そもそも，これらの貝葉は，どういう意味で信用すべきなのであろうか。その年代や素材，作成の意図，将来された事情など，さらに検討すべき問題はないのであろうか。

そうした疑義に関する一端として，たとえば，法隆寺所蔵の貝葉2葉の年代は，かつて，6世紀中のものとされていた。だが，その後の研究により，8世紀後半のものと改められることとなった[23]。その作成意図にも独自のものがありそうで，その素材については，実は，貝葉ではないとの意見も提出されている[24]。その他，高貴寺所蔵貝葉以下の年代についても，4，5世紀から6世紀といった数字の提出されているものがある。しかし，こうした年代には不自然な点もあり，やはり，再検討が必要であると考えられる。

日本における貝葉文書・典籍のありようを窺うには，そうした伝存諸本 (経典) を検討し，加えて，古典一般にみえるところを総合的に考察していく必要があろう。

なお，今日の日本における貝葉文書・典籍としては，河口慧海師蒐集ネパール仏典中のもの[25]，また，もと朝鮮に伝わったとされる九州大学寄託梵文十万頌般若波羅蜜多経[26] や東京国立博物館蔵の八千頌般若波羅蜜多経[27]，また，東京大学蔵の八千頌般若波羅蜜多経[28] や楞伽経[29] などがある。大阪外国語大学 (石濱文庫・杉本文庫[30])，東京の紙の博物館，静岡市立芹沢銈介美術館[31]，米子市立山陰歴史館などに所蔵されるものもあり，また，個人に所蔵されるものもある[32]。これらについても詳細な調査の望まれること言うまでもないが，所蔵元をさらに発掘し，多種多様な同趣文書・典籍を総合的に検討していかねばならない。

3　海外における研究と所蔵機関

海外においては，貝葉文書・典籍 (Palm leaf manuscripts) は，いろいろな観点から研究され，19世紀半ばからこのかた，優れた研究書・研究論文が公表されている。

今日，同趣文書・典籍が多く所蔵されているところとしては，まず，オランダのレイデン (Leiden) の王立言語地理民族学研究所 (Koninklijke Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde)，国立民族博物館 (Rijksmuseum voor Volkenkunde)，レイデン大学 (Rijksuniversiteit Leiden)，またアムステルダム (Amsterdam) の国立博物館 (Rijksmuseum)，イギリス，ロンドン (London) の大英図書館 (British Library) などがあげられよう。

レイデンの王立言語地理民族学研究所は，1851年，デルフト (Delft) に設立されたオランダ領東インド言語地理民族学王立研究所の後身である。今，レイデン大学社会学部等と同じビル (レイデン市停車場前) に同居しているが，組織そのものは異なる。インドネシア文化，

イスラム教，インド文化等々の研究メッカとされ，膨大な蔵書の中には東洋手写本類も少なくない。レイデン大学図書館にも，同様，莫大の東洋手写本が所蔵されている。

大英図書館[33]では，質的にも優れた各地・各様の写本が言語別に分類・保管され，綿密な研究・調査・補修が続けられるとともに，その成果の公刊が行われている。時間の制約上，筆書はほんの一部を閲覧しただけだが，その所蔵本の一端は，次のような出版物によって窺うことができる。比較的近年になるところを掲げよう。

① Albertine Gaur, *Writing Materials of the East*, British Library, 1979.

書題は，東方の書写素材（材料）といった意味であるが，こうした *east* には，いわゆる東洋からシリア，アラビアといった北アフリカ辺までが意味されている。概説的，総合的なパンフレットで，そうした地域における古代の書写素材としての Stones, Tortoise Shell, Bone, Ivory, Wood, Bamboo, Palm leaves, Pippala Leaves, Bark, Clay, Ostraca, Metals, Skin, Leather, Parchment, Vellum, Papyrus, Paper, Rice-Paper, Writing Implements，また，Ink, Stylus, Paint などが取り上げられ，15枚の図版が掲載されている。総計35頁であって Palm leaf manuscripts に関しても若干の言及しかないが，書写素材全体の中におけるその位置付けや，その変種（Palm leaf shape in different materials）としての Cotton, Copper, Paper 等の状況を知るのに有益である（本書は，同図書館や大英博物館の売店，こうした専門書を扱う書店などで容易に入手できよう）。

② Jeremiah P. Losty, *The Art of the Book in India*, British Library, 1982.

本書は，インド亜大陸（および，その周辺）における書写本類の彩飾史（細密画を含む）をテーマとするもので，大英図書館・大英博物館の所蔵本を中心に数多くの貴重書が紹介されている。詳細な解説と多くの図版（カラー・白黒），および，巻末の Select Bibliography は有益である。

③ Albertine Gaur, *A History of Writing*, British Library, London, 1984. Charles Scribner's Sons, New York, 1985.

本書は，文字史をテーマとするもので，文字の起源と発達，主要な文字体系，古代文字の解読，文字と社会，その他についての総合的な論述書である。インド・東南アジアの文字に関連して大英図書館・大英博物館等に所蔵される Palm leaf manuscripts, 金属製尖筆，インキ（顔料）などにも触れられている。本書も大英博物館，その他で入手できるが，日本訳も行われている[34]。

貝葉文書・典籍に関連しては，次のような文献にも注意される。

④ O.P.Agrawal, *Conservation of Manuscripts and Paintings of South-east Asia*, Butterworths, London, 1984. P.24～62（Palm-leaf Manuscripts）

⑤ "Palm leaf books and their conservation", Library Conservation News Number 16, July 1987.

これらは特殊な書写本，就中，Palm leaf manuscripts の保護・修復に関する専門的論説である。

この他，大英図書館においては，レファレンス関係，ガイド関係，イベント関係など，各種のパンフレット・ブロウシュア，冊子物等が，逐次，刊行され，これらの中にも看過できないものが少なくない[35]。

大英博物館には，Palm leaf manuscripts 6 点，Bark, Paper, Bamboo, Ivory によるもの各1，2点などとともに，一本の鉄筆（Iron Stylus）が展示されている（Or. 13653B）。頭部は平たい fan 状を呈しており，これは，書く時にバランスをとり，かつ，ミステークをこすり落とす（scrape away）ためのものと説明されている。19世紀，東インドのオリッサ（Orissa）で用いられていたものとされるが，こうした鉄筆が，はたして，Palm leaf に用いられたかどうかの点については，なお，検討の余地があろう。

ケンブリッジ大学図書館（Cambridge University Library）には，仏教梵本が多く，そのベンドール教授（Prof. Cecil Bendall）によって，*Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library, Cambridge*（London, 1883）が作成・出版されている。ネパール（Nepal）で書写された瑜伽師地論中菩薩地の古写本[36]や普賢行願讃の古写本[37]など，注目される貝葉経典は少なくない。オックスフォード大学図書館（Oxford University Library）には，1950年，ネパールの Chandra Shumshere からサンスクリット書 6,230冊が寄贈されている。貝葉写本も含まれているのではなかろうか。

ドイツのマインツ（Mainz）には，ヨハネス・グーテンベルクの業績を記念するグーテンベルク博物館（Gutenberg Museum）があり，その三階には，世界各地に行われた手写本が展示されている。南西アジア・東南アジアの Palm leaf, Bark, 紙などによる古写本類，エジプトのパピルス・その他，および，筆具類（尖

筆も含む）や書写素材などもみえており，パーリー語，ビルマ語，チベット語，その他による梵篋，折本，巻子本といった諸形態が並べられている。一見しただけで十分に検討していないが，詳しく調査する必要があろう。

パリの国立図書館（Bibliothèque Nationale）には，ポール・ペリオ（Paul Pelliot）将来敦煌出土写本が収蔵されており，この一部に貝葉本がみえている[38]。また，*Catalogue des Manuscrits Singhalais*（Jinadasa Liyanaratne 著，Bibliothèque Nationale Département des Manuscrits, Paris, 1983年）などによれば，スリランカ，インド，タイ，その他で作成された貴重な Palm leaf manuscripts が所蔵されているようである。総合的なところが知り得れば幸いである。

貝葉文書・典籍には，西域南道の于闐（Khotan, 和田）周辺や中央アジア（パミール辺）から出土したコータン語文献，また，敦煌やトルファン（Turfan）等から出土したソグド語文献などもある。これらは，同上，パリの国立図書館，イギリスのインド省図書館（India Office Library, London），同じく大英図書館，スウェーデンの民族学博物館（Ethnographic Museum, Stockholm），ソビエト科学アカデミー・アジア研究所レニングラード支所（Leningrad Branch of the Institute of Asia of the RS Academy of Sciences, Leningrad），その他に所蔵され，研究も多分に進展しているようだが[39]，書写素材史研究上からの検討，というより，書誌学的研究上からの検討，また，それら相互の比較研究などは，必ずしも十分ではないようにみうけられる。

Palm leaf manuscripts は，それが作成された現地の側にも数多く残っていると思われる。インド，スリランカ，インドネシア，タイ，チベット，ネパール，ブータン，ビルマ（ミャンマー），その他における寺院や役所，文書館や図書館，研究機関・組織などを詳しく調査し，早い内に保全・登録の措置を講じ，調査網なり総合目録なりを作る必要がある[40]。しかし，仏典類を除けば，いまだ国境を越えての，国際的な相互調査・研究は行われていないようにみうけられる。

管見するところ，同趣の手写本類が所蔵されている主な施設・機関としては，少なくとも次があげられよう。

［北インド］

デリー（Delhi）の国立博物館（National Museum）[41]

［南インド］

マドラス（Madras）のコネマラ公共図書館（Connemara Public Library），ハイダラバード（Hyderabad）のサラール・ジャング博物館（Salar Jang Museum）

［東インド］

カルカッタ（Calcutta）の王立ベンガル・アジア協会（Royal Asiatic Society of Bengal），国立図書館（National Library）、インド博物館（Indian Museum）

ブバネーシュワル（Bhubaneswar）のオリッサ州立博物館（Orissa State Museum）

ナーランダ（Nalanda）のナワ・ナーランダ・マハー・ヴィハーラ研究所（Nava Nalanda Maha Bihar）

パトナ（Patna）のビハーラ・リサーチ・セサイエティ（Bihar Research Society[42]），カシ・プラサド・ジャヤスワール研究所（Kashi Prasad Jayaswal Research Institute）[43]

［西インド］

ボンベイ（Bombay）のアジア協会ボンベイ支部（Bombay Branch of the Royal Asiatic Society），プリンス・オブ・ウェールズ博物館（Prince of Wales Museum）

［スリランカ］

コロンボ（Colombo）のコロンボ国立博物館[44]（Colombo National Museum, 図書館併設）

ベントタ（Bentota）のガラパタ・ヴィハーラ寺（Galapata Vihara）

キャンディ（Kandy）の国立博物館（Kandy National Museum）

マータレー（Matale）のアルヴィハーラ寺（Aluvihara）

アヌラーダプラ（Anuradhapura）のジェタヴァナ・ラマヤ（Jetavana Ramaya）

［ネパール］

カトマンズ（Kathmandu）のネパール国立古文書館（Nepal National Archives）[45]，ネパール国立図書館（Nepal National Library），キシャール（国立）ライブラリー（Keshar Library）

［インドネシア］[46]

ジャカルタ（Jakarta）の国立博物館（Museum Nasional），国立図書館（Perpustakaan Nasional）

シンガラジャ（Singaraja）のグドン・キルティ

ヤ図書館（Gedong Kirtya），言語調査研究所（Balai Penelitian Bahasa）

デンパサール（Denpasar）の国立ウダヤナ大学文学部ロンタル図書館（Fakultas Sastra Universitas Udayana, Pustaka Lontar），文書センター（Pusat Dokumentasi），バリ博物館（Museum Bali）

［タイ］

バンコク（Bankok）の国立博物館（National Library），バジラナーナ国立図書館（Vajiranana National Library）

［中国］

雲南省西双版納（Xīshuāngbǎnna）傣族（Dǎizú）村寨[47]

蘭州（Lanzhou）の西北民族学院[48]

烏魯木斉（Ürümqi）の新疆維吾爾自治区博物館[49]

これらは，その所蔵施設・機関としてはほんの一端でしかないであろうし，また，それぞれの実情も明かでない。だが，少なくとも，これらにおいては，少ないところでは数部，多いところでは数千部から万部をこえる点数が所蔵されている。

なお，パキスタンのカラチ（Karachi）の国立博物館（National Museum of Pakistan）を訪問させていただいたが，目標とするものは見当たらなかった。現今，イスラム教を奉ずる国ではあるが，しかし，こうした国でも，丁寧に調査すれば大小の成果は得られようかと思う。

結

ヤシの葉，および，尖筆は，インド系文字を中心とする“文字や綴字法の推移・変遷”，すなわち，“その成長”と密接に関連している。文字の形体や筆画，その運筆方法や書字方向（上下行，左右行）などは，書写素材により，多分に規制されるからである。これは，古代メソポタミア，その他，また，古代中国においても同様であった。書写素材史の研究は，文字史，綴字史，文体史等の上においても重要な問題を提起することになるであろう。

書写素材としてヤシの葉を用いるといっても，実は，その用い方は一様ではない。国や地方，民族，言語圏・文化圏や宗教圏などの差異により，その用法，また，筆具やインキ類，書籍・書帙としての仕立て方などには，大小の相違がみてとれそうである。筆者は，こうした点にも興味を覚えるものであるが，このように，素材・用法・形態等を考察することにより，思想・文化の伝達を本命とする書物のあり方やその歴史をもたどり得るのではないかと考える。

しかしながら，この種の写本は，殊に乾燥に弱く，傷みやすい。消滅・崩壊の危険をともなうものは少なくない[50]。乾湿管理・集中管理といった特別の保存処置はどうしても必要となろう。また，徹底した書誌学的記録とともに，実測図，写真（カラー，モノクローム）記録，複製本の作成も早急に検討すべきである。そのためにも，国境を越えた相互調査・研究は急がれねばならないであろう。

なお，貝葉文書・典籍については，チベット，ネパール等によく行われ，また，敦煌，トルファン，ウィグル，その他からも出土した貝葉型の紙本経典，敦煌出土の折本なども細かく吟味・検討する必要がある。これらの間における前後関係，経緯やいきさつが問われるからである。 (Dec. 31, 1993)

注

1）ヤシ科のコリファヤシやパルミラヤシなど。コリファヤシ属（*Corypha*）は，熱帯アジア，マラヤ，スリランカ，ベンガル，スンダ島等に産し，パルミラヤシの属するオウギヤシ属（*Borassus*）は，熱帯アフリカ，熱帯アジアの産とされる（後掲，『樹木大図説』Ⅲ，1169頁，1163頁）。使用されたヤシの特定については，時代毎，地方毎にヤシの生態や植生を検討し，現在する貝葉文書・典籍を分析していく必要があろう。

なお，こうした書写素材については，次の文献が参照される。

小林良生「タイ国に貝葉“バイラーン”を求めて」，『百万塔』，第55号，1980年4月。

小西正捷「インドにおける紙本以前の文書素材」，『中央大学アジア史研究』，第6号，1982年3月。

阿部登著『ヤシの生活誌』，古今書院，1989年2月。

就中，阿部登氏は，目下，貝葉の構造調査，また，その耐久性について御研究中である。

2）ヤシの葉の調整方法については，改めて検討したい。貝葉文書・典籍については，綴じ穴（Stringhole）ひとつにもそれなりの地方的特徴が認められるようであるが，こうした問題についても別に言及したい。なお，綴じる場合に，紐でなくて竹串（Bamboo skewer）を用いたものもある（ビルマ）。

3）Stylus とは，本来，蝋板（Waxed tablet）などに

文字を書く時の筆具で，先端がとがり，他の端が広く平らになった鉄筆をいう。先端の方で書き，他端の方でこすり消した。古代ローマ以来のものとされ，“文体（Style）”という言葉の語源ともなっている。尖筆の英語訳としては，必ずしも適切なものではないかもしれない（注７文献参照）。また，貝葉の筆具（筆刻具）として，いつから鉄製の尖筆が用いられ出したかは未だ明白ではない。

4）紙は，中国では，少なくとも前漢早期には存在していたようで，その文帝，景帝，武帝の時代，紀元前176～141のものと推定される紙（麻紙）が発見されている。後漢書には，105年（元興元年）に蔡倫が紙を作って献上したとみえるが，中国で紙（麻紙）が流通し出したのは，後漢の後半，あるいは，その末期（滅亡は220年）から三国，西晋の時代にかけてのことではなかろうか。トルファンにおける状況からしても（拙稿「『吐魯番出土文書』における量詞について」，『島大国文』，第20号，1991年，また，「トルファン墓葬出土文書における量詞の考察」，『島根大学教育学部紀要』，第26巻，1992年），木質簡牘類との交代は，その魏晋南北朝の頃とみうけられる。

インドの，その中北部や西部で，写本の材料として紙が一般的となったのは15世紀以降とされる（小西正捷氏，注１文献）。その東部，また，西南・東南アジアの島嶼部における紙の普及は，さらに降るであろう。スリランカでは，1737年にキリスト教のオクターヴォ（Octavo）版が出る以前は，仏典類の手写や記録には Palm Leaf が用いられていた（松本脩作「スリランカの図書館」，『図書館雑誌』，vol.71, No. 8，1977年８月。）

5）阿部氏，注１文献，184頁。

6）サラスワティは，ヒンドゥ教における女神の一で，今日，学問・技芸の神として崇拝されている。

7）拙稿「バリ島のロンタル（LONTAR）文書について」，『国語教育論叢』，第３号，1993年８月。

8）もっとも，エジプトのパピルスがそうであるように，バリ島では土産物用のものが現代でも作成され，博物館前などで売られている。また，タイのバンコックでは，門前町などでバイラーン（貝葉文書・典籍）が売られている由であり，スリランカのマータレーのアルヴィハーラ寺では，貝葉（パピラ）の作成実演が行われているという。

9）玄奘は，法相宗・倶舎宗の開祖。中国河南の人，629年（唐の太宗貞観３年）秋８月，都長安を出発し，天山南路からインドに入り，ナーランダ寺の戒賢らに学び，645年（同19年）春正月帰朝し，後，大般若経，倶舎論，成唯識論など多数の仏典を翻訳した。大唐西域記12巻はその旅行記であり，大慈恩寺三蔵法師伝10巻はその伝記である。生年は，602年（隋の文帝仁寿２年），または，596年（同開皇16年）とも600年（同20年）とも伝える。歿年は，664年（高宗麟徳元年），長安の玉華寺に遷化した。

10）これらの梵本は，中インド系の正梵音・ブラフミー文字等によるものが多かったであろう。この他，樹皮経の形で将来されたものもあったと推測される。西域道筋で収集した経典などには，貝葉を模した貝葉型の紙本経典もあったかもしれない。また，梵語・梵字（Sanskrit）以外の言語・文字を用いたものもあったであろう。

玄奘の前後には，まだ，暗誦・口誦の形で中国に渡った仏経もあったはずである。

11）大慈恩寺三蔵法師伝，巻７，『大正新脩大蔵経』，第51巻，261頁。

12）渡辺海旭氏（『壷月全集』，巻上，同刊行会発行，1933年＜昭和８年＞５月，550頁，561頁），注24文献（『梵字悉曇』，89頁）などにも言及がある。

13）大井田鶴子氏の御調査により，現在，沖縄県の東南植物楽園（沖縄市字知花2146）にパルミラヤシの苗が植栽されていることが判明した。これは，同園の園長がインドネシアから種を持ち帰って植えたもので，４，５年たった今，40～50センチの丈であるという。大井氏を介し，同園園長秘書樋口純一郎氏の御指導で，標本用に一葉をいただくことができた。幼木ながらもその葉にはパルミラヤシの組織的特徴がはっきり認められる。

沖縄県の国営海洋博覧会記念公園（同県本部町石川424）には，パルミラヤシ，コリファヤシの両種が栽培されているとのことであるが，未確認である。

この他，本州，九州，四国において熱帯性の植物を植栽する植物園（温室）を訪問し，あるいは，書信・電話をもって問い合わせてみたが，目下，これらを植えているところはないようである。

また，イギリスのキュー王立植物園（Royal Botanic Gardens Kew）に，コリファヤシ，パルミラヤシ等が植えられているか否かについて，British Library の保存室のバーナード氏に電話で問い合わせていただいたところ，植えられていないとのことであった。ドイツ，ベルリンのダーレム植物園（Botanisher Garten und Botanishes Museum Berlin-Dahlem）でも同様であろうとのことであった（Jul.30,1993，調

査)。これらの植物園は，アメリカのニューヨーク植物園（New York Botanical Garden）とともに“世界の三大植物園”といわれている。

14) 悉曇学は，インドに発生したものだが，仏教，および，梵漢訳経学とともに中国から伝えられたとみられる。五十音図の成立に重要な影響を及ぼしている。また，日本におけるその成果として，空海（774～835年）に梵学悉曇字母并釈義1巻，円仁（794～864年）に在唐記1巻，宗叡に悉曇私記（悉曇字記林記）1巻，安然（841～902年）に悉曇蔵8巻，明覚（1056～1106年？）に悉曇大底1巻，反音作法1巻，心覚（1117～1180年）に多羅葉記3巻，降って，浄厳（1639～1702年）に悉曇三密鈔3巻，慈雲（1718～1804年）に梵学津梁（注18文献）などがある。

　就中，多羅葉記（常喜院心覚撰）は，「多羅葉」（多羅樹 tāla の樹葉の意）を冠した梵語語彙集で，イロハ47部を立て，義浄千字文・礼言梵語雑名・全真唐梵文字・翻梵語・信行梵語集などを資料として編集されている。巻末（端書き）に，鷲珠抄・草繋抄などとともに「貝葉抄」との書名もみえる（大正新脩大蔵経，第84巻，1963年＜昭和38年＞7月再刊。642頁)。イロハ順の字書としては，色葉字類抄と並ぶ現存最古のものの一とされている。

15) 松村明編『大辞林』，三省堂，1988年11月発行，1989年3月第8刷。なお，『広辞苑』（新・旧，岩波書店)，『日本国語大辞典』（小学館）などは「仏教語」としない。

16) 平楽寺書店，1959年3月。15頁，また，115頁など。

17)「貝葉梵文　　南都招提寺蔵」として1葉相当の梵字が，縦書き毛筆体で，計16字あがっている。縦書きで，しかも，16字という点に不審がある。貝葉の輪郭が示されていないのも例外的であるので，これは，あるいは，貝葉（そのもの）によるものではなかったのかもしれない。

18) 通称約 1,000巻　但し，未完か。河内高貴寺の慈雲（1718年＜享保3年＞～1804＜文化元年＞）編。高貴寺所蔵。『慈雲尊者全集』，第9輯下（長谷宝秀編纂，高貴寺発行，1926年＜大正15年＞3月）の巻頭図版，また，391頁による。「更ニ之ノ宇内ニ捜ラバ，当ニ二三十葉ヲ得ベシ。」（原文漢文）ともある。なお，「総目録」だけは，『大正新脩大蔵経』の第84巻（既出，注14参照)，810頁にも掲出されている（原本は高楠順次郎氏校本)。

19) 第2巻，1942頁。1961年6月第3版。なお，ここには，高貴寺所蔵貝葉は2葉，来迎寺所蔵貝葉は4葉とある。後者については，渡辺海旭氏論文「京都百万遍知恩寺什宝多羅葉梵筴断片に就きて」（『宗教研究』，第1巻第1号，794頁）にも4葉とある。

　なお，青蓮院蔵本につき，岡教邃「本朝伝来の梵蔵古写経（下)」（『中外日報』，1926年＜大正15年＞7月27日）によれば，「貝葉梵筴一葉」とある。

20) 日本語研究史上においても同様に評価されている。国語学会編『国語学大辞典』（東京堂出版，1980年＜昭和55年＞9月，839頁）参照。執筆担当は馬淵和夫氏。なお，ここにも，法隆寺所蔵の貝葉は6世紀前半のものとある。

21) それだけで完本とみられるものもあるが（法隆寺所蔵本――般若心経・仏頂尊勝陀羅尼)，それならそれで検討の余地がありそうである。こうした素材や形態が，中国から将来されたとすれば，ここにも問題があるかもしれない。

22) 大慈恩寺三蔵法師伝には，玄奘の訳経の日課を誌して，「五更復起。読誦梵本朱点次第。擬明旦所翻。毎日……」（巻7，既出，注11文献，260頁）とみえる。これは朱筆（毛筆）による梵本（貝葉・樹皮）への書き込みかとみうけられる。料材にもよるが，この程度の書き込み，目的・用途なら毛筆も可能であろう。

　筆者は，バリ島クタ（Kuta）で新たに調整したパルミラヤシ（ンタール）の葉を入手し，手許の毛筆で細字墨書を試みたが，紙や板・布などにおけるような墨潤は得られなかった。葉面は墨書に適した材質ではないようである。墨汁そのものも水性であるから，このままでは熱帯地域には適さない。すなわち，ヤシの葉は，炭粉・油脂，あるいは，オイルペイントの類なら可能だが，墨筆（毛筆体）は受けつけないのである。なお，樹皮の場合については未勘である。

23) 干潟龍祥「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」，『密教研究』，第68号，1939年（昭和14年)。

24) 田久保周誉著，金山正好補筆『梵字悉曇』，平河出版社，1981年10月，56頁。金山氏説。

　なお，福井文雄「般若心経」，『講座敦煌7　敦煌と中国仏教』，大東出版社，1984年12月，40頁，51頁参照。

25) 河口師蒐集ネパール仏典（第1類の梵語写本）は，東京大学に390部（内29部は欠本)，東洋文庫に16部所蔵され，前者にも貝葉写本がある（Seiren Matsunami, *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*. 1965)。東洋文庫蔵の

1点に，河口師がシャール・ゴンパ寺（Zwa-lu dgon-pa）の規範師喇嘛より授与された貝葉梵本法華経写本がある。書写年代は，Newari samvat 191年（1070年）。全181葉（別に前後に表紙），表裏に各5，6行，2穴，筆具は毛筆に墨汁。本書は，河口慧海編集（池田澄達英文序）『貝葉梵本法華経』（梵文法華経頒布会，1926年12月，コロタイプ版）として刊行され（1956年2月，河口正氏の手により丸善から再版された），この間の事情については，壬生台舜氏「河口コレクションに就いて」（『日本西蔵学会報』，第2号，1955年10月），金子良太氏「Kダッシュ梵文「法華経」余話」（『東洋文庫書報』，第8号，1977年3月）に詳しい。

26）干潟龍祥「梵文古写経雑報——朝鮮発見ターラ葉篋十万頌般若と福岡県求菩提山国宝銅版法華経の梵文陀羅尼について——」，『九州大学哲学年報』，第2輯，1941年（昭和16年）3月。

この年代は，大体，10世紀中のものとされている。

27）岡教邃「本朝伝来の梵蔵古写経（下）」（既出，注19文献）によれば，「又東京帝室博物館に朝鮮京畿長湍府宝鳳山華蔵寺の旧蔵に係る貝葉梵筴一葉がある，」云々とみえる。

同氏「朝鮮華蔵寺の梵筴と印度指空三蔵」，『宗教研究』，新第3巻，1926年。

28）注26文献による。ネパールで作成されたもので，その169年（1049年），162年（1042年）の年号がある。

29）東京帝国大学文科，印度学教室蔵。『壷月全集』，巻下，1933年12月，216頁による。

30）『石濱文庫目録』（1979年3月），『杉本文庫目録』（1983年9月）。文庫の前者は，石濱純太郎氏の，後者は，杉本良巳氏の収集，寄贈にかかる。

31）『芹沢銈介の創作と蒐集』，紫紅社発行，1982年9月，202頁。

32）坂本恭章氏蔵本（フランス語による貝葉の経文。カンボジアにて求められたとのこと。阿部氏，注1文献，183頁による），家永泰光氏蔵本（阿部氏御教示），杉本良巳氏蔵本，など。

33）大英博物館（British Museum）のLibrary collectionsは，1973年7月1日にBritish Library Boardに移された。大英図書館の所在地は，Great Russell Street, London WC1B 3DGであり，その展示ギャラリーは大英博物館（所在地は同上）の中にある。但し，こうした貝葉文書・典籍や中国古代の木簡類などを所蔵・研究するOriental and India Office Collections（Southeast Asia Collections）は，197 Blackfriars Road, London SE1 8NGに所在する。

34）矢島文夫・大城光正訳『文字の歴史』，原書房，1987年12月，1991年6月。

35）J.P.Losty & M.J.C.O' Keefe, *Sanskrit and Prakrit Collections in the British Library. Guide to the Department of Oriental Manuscripts and Printed Books*（London, 1977年）など，また，絵葉書の類にも有益なものがある。

36）干潟氏論文（注26文献）によれば，次のような写本があがっている。

Mss.Add.1702 瑜伽師地論中菩薩地，8世紀後半位のネパールのもの。

Mss.Add.1049 ヒンドゥ教関係のもの，Nepal samvat 252年（857年，または，858年）。

Mss.Add.866　Nepal samvat 128年（1008年）。

37）渡辺氏論文（注12文献，305頁）によれば，次のような写本があがっている。

Mss.Add.1680　貝葉　6葉，Nepal samvat 188年（1068年），優婆塞チナインシュヤパーカ書写。

なお，渡辺氏には，「龍敦皇立亜細亜協会」所蔵の四十華厳経（Nepal samvat 286年<1166年>，全筴貝葉を用い，葉数289葉，鉤体の梵字をもって書す）についての言及もある（注12文献，324頁，556頁）。

戸田宏文「ケンブリッジ大学図書館所蔵ネパールの貝葉本について」，『名著通信』，第17号，1978年2月。

38）西岡祖秀「沙州における写経事業」，『講座敦煌6 敦煌胡語文献』，大東出版社，1983年8月，381頁，388頁。

吉田豊「ソグド語文献」，『(同上)』，189頁，190頁。

39）熊本裕「コータン語文献概説」，既出，『講座敦煌6 敦煌胡語文献』，101頁以下。

岩松浅夫「敦煌のコータン語仏教文献」，『(同上)』，141頁以下。

吉田豊氏，注38文献。

40）タイでは，その歴史と文化の研究にとって重要な史料であるとして，各地でその系統的収集と保存の動きがみられるとされる（石井米雄・吉川利治編『タイの事典』，同朋社出版，1993年3月，265頁。執筆担当は石井米雄氏）。

41）*Manuscripts from Indian collections; descriptive catalogue*. National Museum, New Dehli, 1964.

42）Rāhula Sāṅkṛityāyāna, Sanskrit Palm-Leaf MSS in Tibet, *Journal of the Bihar and Orissa Research Society*, vol.XXI, Pt. I, 1935.

Rāhula Sāṅkṛityāyāna, Second Search of Sanskrit Palm-Leaf MSS in Tibet, Ibid(*JBORS*), vol. XXIII, Pt. I, 1937.

Aniruddha Jha, ed. by, *The Catalogue of the Tibetan Texts in the Bihar Research Society*, Patna, 1965.

43）1951年，ビハーラ州政府によって設立され，1953年以来，Tibetan Sanskrit Works Seriesを刊行している。注41文献参照。

44）コロンボ博物館には，*Catalogue of Palm leaf Manuscripts*の刊行がある由である。（シンハラ語の経典 2,500点が掲載されている。阿部登氏御教示）

45）もと，ビル・ライブラリー（Bir Library）としてトリチャンドラ・カレッジ（Tri-Chandra College）に保管されていたが，1967年にここに移され，現在はネパール政府教育省考古学局の管理下にある（山田伸枝「ネパールの図書館（2）」，『図書館界』，vol. 35, №1, 1983年5月）。

Sanskrit Seminar of Taisho University, Buddhist Manuscripts of the Bir Library,『大正大学研究紀要』，第40号，1955年1月。

1970年にネパール・西ドイツ写本保護事業（Nepal-German Manuscripts Preservation Project）が発足し，蔵書目録の作成，写本のマイクロフィルム化が行われたという。未見。

長尾雅人「カトマンドウの仏教写本典籍」，『岩井博士古稀記念典籍論集』，1963年6月，同記念事業会編・刊。

Takaoka Hidenobu, A Microfilm catalogue of the Buddhist manuscripts in Nepal, vol. 1, 1981年8月，Buddhist Library（仏教資料文庫）発行。

ジゥセッペ・ツッチ「チベット及びネポールにおいて新たに発見せられた仏教典籍について」，『大谷学報』，第36巻，第1号，1956年6月。

46）石田実氏の御教示による。

47）艾温扁・征鵬「貝葉経――傣族文化的宝蔵」，『思想戦綫』，1981年2。

中国社会科学院民族研究所・国家民族事務委員会文化宣伝司主編『中国少数民族文字』，1992年10月，中国蔵学出版社，63頁。

なお，傣族は，南西タイ諸語の一，傣仂語（Tai Lue）を話し，モン文字系の文字言語をもつとされる（『言語学大辞典』，第5巻，1993年7月，三省堂，203頁）。傣族の貝葉文書・典籍は，書写素材史研究上，特に注目される。

48）梅村坦「中国の研究機関と博物館――上海・洛陽・西安・蘭州・ウルムチ・トゥルファン――」，『東洋文庫書報』，第11号，1980年3月，137頁。

チベット語の「かなり多量の貝葉文書が，タイトルを付して蔵されている」と報告されている。

49）注48文献，154頁，157頁。

同自治区東部のハミ（Hami, 哈密）出土の「ウィグル文貝葉経」（600余点）が所蔵されていると報告されている。しかし，「1葉30行」といった写本は，貝葉（Palm leaf）そのものでなく，貝葉型紙本経典に相当するのかもしれない。同氏の紹介されている次の文献にも，紙（麻紙）と墨（色）との文言しかみえないようである。

呉震「哈密発現大批回鶻文写経」，『文物』，1960年第5期，85・86頁。

馮家昇「1959年哈密新発現的回鶻文仏経」，『文物』，1968年第7・8期，90～95頁。

なお，掲出の図版によれば，この写本は縦書体で，左側から右へ書かれている。綴穴は左寄りに1穴。

50）調製・整形の直後に，束ねたまま，小口部に赤色や金色の塗料を塗ってしまうものがある。その後，これを一枚ずつはがしながら筆記（筆刻）していくのであるが，これらは比較的傷みにくい。しかし，こうした処置をともなわない，より一般的な文書・典籍類は，乾・湿に弱く，小口部から風化し，黒ずんでいくことが多い。

その保存につき，旧稿においては“過湿（高温多湿）”を畏れたが，現在は，むしろ，逆に，その作成地（ヤシの生産地）の気候に学ぶべきだと考える。

［附記］

○筆者は，この夏の約1ヵ月（1993年7月23日～8月18日），「パーム・リーフ文書（Palm Leaf Documents）の研究」（同趣文書についての訪書，調査・研究）というテーマでイギリス，その他に研修旅行をさせていただいた。本稿は，その報告を兼ね，若干の調査・研究の結果をしたためたものである。

研修旅行は，殊に，このアジア地域における書写素材史研究上の理由からのことであったが，これに関連して，多くの先達から有形無形の御指導をいただいた。記して御礼申し上げる次第である（五十音

順，敬称略)。

阿部　登　筑波国際農業研修センター
石田　実　Denpasar 領事
井上永幸　本学助教授
大井田鶴子　書家（東京都在住）
木下正一　かごしま熱帯植物園
小宮英俊　紙の博物館学芸部長
小山　勲　東洋文庫
杉本良巳　米子市立山陰歴史館館長
高林成年　京都府立植物園園長
Nimade Sarine　The Gedong Kirtya, Singaraja, Bali
Patricia M.Herbert　Oriental and India Office Collections, The British Library
Hamish Todd　Oriental and India Office Collections, The British Library
樋口純一郎　東南植物楽園
藤井善三郎　藤井有鄰館館長
Mark Barnard　Oriental Conservation Studio, The British Library
松井映樹　東京都夢の島熱帯植物館
松岡久美子　Oriental Conservation Studio, The British Library
森　縣　宮内庁書陵部文献専門官
渡辺兼庸　東洋文庫文庫長

阿部登先生には格別の御指導をたまわり，また，本学附属図書館職員各位には並々ならぬ御高配をいただいた。衷心より感謝申し上げたい。

○　本稿では，先に引用した以外にも多くの文献を参照した。その一部を列挙する。

上原敬二著『樹木大図説』Ⅲ，有朋書房，1961年（昭和36年）4月初版，1977年（同52年）4月第7刷。

林　彌栄，他監修『原色樹木大図鑑』，北隆館，1985年（昭和60年）5月初版，1987年（同62年）11月第2版。

和久博隆編著『仏教植物辞典』，国書刊行会，1979年（昭和54年）10月。

金岡秀友・柳川啓一監修『仏教文化事典』，佼成出版社，1989年（平成元年）10月初版。

東北大学文学部東洋・日本美術史研究室監修，佼成出版社編集『河口慧海請来チベット資料図録』，佼成出版社，1986年11月。

株式会社竹尾著『世界の手漉紙』，1979年11月。

小宮英俊著『紙の文化誌』，丸善，1992年7月。

潘　吉星著・岩田由一訳『中国古代造紙技術史』，1979年8月，『百万塔』臨時増刊。原典は『文物』1973年第9期，所載。

小西正捷「インドの古文書料紙と製紙技術の成立」，『山本達郎博士古稀記念　東南アジア・インドの社会と文化』（上），山川出版社，1980年。